

平成二十四年度

校内読書感想文作品展

カンタベリー日本語補習校

入賞者

最優秀賞	「少年の日の思い出」を読んで	中学部二年	上田 宗平
優秀賞	点字について	小学部二年	反町 千那鶴
優秀賞	おいしいれこわい	小学部二年	本江 瑛南
優秀賞	「わすれられないおくりもの」	小学部四年	斉藤 優介
佳作	「にじいろのしまうま」	小学部一年	西岡 真央
佳作	「幽霊城の秘宝」を読んで	小学部三年	鈴木 美愛
佳作	「十五少年漂流記」	小学部四年	東山 絵美
佳作	「ヘレンケラー」を読んで	小学部四年	グレイ マヤ
佳作	「千の風になって」	小学部五年	小林 優恵
佳作	国境をこえて	小学部六年	上田 未早
佳作	「この子を残して」	中学部一年	松本 峻
佳作	「星の王子さま」	中学部三年	オーマンディ ウラン

最優秀賞

「少年の日の思い出」を読んで

中学部二年 上田 宗平

「取り返しをつかないことをしてしまった。」

これが「少年の日の思い出」を読み終えた時に最初に感じたことだ。

主人公は蝶の収集に執着していた。彼はなかでもクジャクヤママユを熱烈に欲しがっていた。主人公の隣人、エーミールがこれを持っていたと聞いた時、彼がどれだけ興奮したかは言うまでもない。彼は逆らいがたい欲望を感じて盗みを犯した。しかし、大きな満足感も束の間だった。主人公の良心は目覚め、自分は下劣だと悟った。彼はクジャクヤママユを潰してしまったのだ。彼はためらいながらもエーミールにすべてを告白した。エーミールは主人公を罵ることはしなかったが、彼を軽蔑した。主人公は立ち去った後、自分の集めた蝶を一つずつ粉々に潰していった。

少し暗い感じがする話だけれどもこの話のおかげで僕は自分の性格を見つめ直すことができたと思う。

物語では、主人公が道徳に反する盗みを犯してしまったけれども、この行動は彼が誘惑を断ち切れなかったことを表していると思う。僕も誘惑に負けてしまうことは多々ある。

ある時、パソコンを使う宿題が出された。僕は減多にパソコンを使えないので嬉しかった。ウェブサイトを検索していると「無料オンラインゲーム」と浮かび上がった。僕はちよつとした好奇心でウェブサイトを開いてみたが、少し遊ぶつもりがそのゲームから離れることができなくなった。宿題の方は手を付けなかったから結局失格となった。後で弱い心に負けた自分が嫌になった。

この体験から僕は誘惑に弱いということを知った。

主人公は盗みを犯した後、すべてを告白する勇気を起こした。最初読んだ時、なぜ彼は告白しようと思ったのか分からなかった。しかしよく読んでいくうちに彼は罪悪感に耐えられなかったと分かった。僕だったらどうしただろう。潔く謝れただろうか。僕は臆病だからごまかしていただろう。しかしそれは卑怯なことだ。だが、僕も主人公と同じ行動をとったに違いない。なぜなら悪いことをして平気でいられる自分が怖くなってくるからだ。

物語の最後、主人公は自分の宝物だった蝶の標本を一つずつ潰していく。彼は蝶を潰しながら、盗みを犯してしまったという罪悪感、あんなことなどしなければよかったという後悔、そしてどうしてあんなことを自分はやったのかという自己嫌悪に陥っていたと思う。

「少年の日の思い出」は僕に僕の中の卑怯で臆病な部分を気付かせてくれた。自分の弱い部分が見えてくるのはあまり気持ちのよいことではなかったけれども、一つの目標ができた。どんなに叱られたり責められることが怖くても自分の弱い心に負けない人になりたい。

優秀賞

点字について

小学部二年 反町 千那鶴

「てとてとてとて」は手についての本だけど、わたしが一ばんすきなところは、点字のところでした。

わたしは「すごい」と思いました。それは、目が見えない人は、ゆびをつかって、点点を読むからです。目が見える人は、ただの点点に見えるけど、見えない人には、字なのです。

だれかが、わたしに、

「点字を読みなさい。」と言ったらわたしは、

「それは、おぼろかしすぎて、できません。」と、ことわります。それは、点字は、ひらがなのかたちではなく、ばらばらにならんでいるからです。わたしが点字を見るたびに、

「太いゆびの人は、一ぺんに二つさわってしまうからたいへんそうだなあ。」と
思います。

わたしが小さいころ、エレベーターで、点字を見るたびに、

「この点点なに。」ときいていました。おかあさんは、

「目が見えない人の字なのよ。」とこたえてくれました。

そしてきよ年、わたしのクラスに、ニキーターという目が見えない女の子がいました。いつも点字をつけていました。ニキーターちゃんは、てんさいです。それは、一かいだれかのこえを聞いたら、もう、あたまの中でそのこえをおぼえるからです。

点字は、すぐくすばらしいとわたしは、思います。それは、目が見えない人には、点点がひつようだからです。点点があると、目の見えない人は、いろいろなことができるからです。それがすばらしいと思いました。

書名「てとてとて」

優秀賞

おしいれこわい

小学部二年 本江 瑛南

こわいお話が読みたいな、と思ってこの本をえらんでみました。そしたら、本とうにこわかったです。何がこわかったかというと、ねずみばあさんと先生です。ねずみばあさんは、こえがおそろしいし、わたしがたべられそうだし、おこった先生は、おこったおかあさんとなっているからです。

おしいれもこわかったです。あきらにとつて、おしいれの右のかべのしみがうげんのよこがおのようによくみえて、とてもきみがわるいとかんじた気もちがよくわかるからです。

わたしも、くらいところがきらいです。

わたしのいえにおしいれはないけど、おかあさんがおこると、ノートイコーナーにつれていかれます。そんなとき、とてもさびしくなります。もつとプンプンおこった気もちがします。おかあさんが、ちゃんとわたしの話をきかないからです。

そんなときは、わたしもあやまる気はしません。

先生は、あきらとさとしの話をちゃんとできなかったことをはんせいして、二人をおしいれからだしてくれました。

わたしとおかあさんもおこっていても、ちゃんと話をしたほうがいいと思います。

書名「おしいれのぼうけん」

優秀賞

「わすれられないおくりもの」

小学部四年 齊藤 優介

ぼくが小さい時に、お母さんがいつも読んでくれたのが、この本です。

主人公のアナグマはかしくくて、いつもみんなにたよりにされています。ぼくもとてもアナグマが好きです。なぜなら、絵本の中のアナグマの顔が優しくだからです。

一番印象に残ったところは、アナグマが死んでしまったところです。アナグマはもうすぐ死んでしまうことを知っていました。けれど、おそれてはいませんでした。ただ、残していく友達のことが心配でした。そして長いトンネルのおこうに行ってしまったても、あまり悲しまないようと、みんなに言っていました。

アナグマが死んで、みんなはとても悲しんだけれど、そのあとみんなはアナグマが残してくれた楽しい思い出を語り合いました。すると、かなしみは雪とともに消えていきました。アナグマは、別れた後でも、宝物になるような、ちえや工夫を残してくれていたのです。アナグマは死んでしまった後でも生きていた時と同じくらいみんなにたよりにされていた事にとっても感心しました。

ぼくは、少し前に同じような出来事がありました。その出来事とは、六十七年前に広島でげんばくが落とされた時の事をみんなに話すためにクライストチャーチにやってきたささ森しげ子さんとの出会いです。

しげ子さんは、アナグマのように優しそうでとても明るい人でした。そしてしげ子さんは、

「私はみんなよりも早くあのよにいつてしまうから、若い子供たちにもっと話しておきたい。」
と、おっしゃっていました。

しげ子さんがぼくにくれたおくり物は『はら立ちダンス』です。はら立ちダンスは、はらが立っている時に空気に何度もパンチするダンスです。このダンスをするとはらが立っていたのがなぜか笑ってしまいます。そして世界の平和を作るために一番大切な事は、家族や兄弟を愛する事だと教えてくれました。

しげ子さんはもう八十歳でカリフォルニアに住んでいるので、もう会う事はできないと思います。でもしげ子さんにもらった忘れられないおくり物をずっと大切にしたいと思います。